



No. 120

ティー・ブレイク

Tea Break

告白

人間の知恵というのは伝聞と実体験とからなる。もちろん、数が少ないという難点はあるものの、迫力があるのは実体験のほうで、実際に使えたり、応用が利いたりするのも、どちらかといえば実体験のほうである。

そして、強烈な実体験というものが、比類なき名作を生む。例えば、子供たちがよく歌う「しゃぼんだまとんだ」。これなどは、子供を亡くした親が作ったものであるという。普通の「しゃぼんだま」は屋根まで飛んでから壊れて消えるのに、彼女の「しゃぼんだま」は、飛ばずに消える。生まれてすぐに、こわれて消えてしまう。風邪をこじらせたのだろうか。歌の中ではしきりに風が吹かないようにと言っている。真相を知ると、かぜ、かぜ、吹くな……、が本当に悲しく響く。

だが、この一方で、想像もまた、多くの名作を生む。例えば、森繁久弥の知床旅情。この歌の中では、国後で白夜が明けることになっている。しかしながら、明けないからこそ白夜なのであり、だいたい国後あたりの緯度で白夜が見られるわけではない。実際に森繁氏は、国後に行ったこともなければ、白夜というものを見たこともないという。全て、閉じた部屋の中で作られた創造の産物である。

松田聖子の歌った「白い夜」でも、白夜について、夜にもかかわらず太陽が青白く光る、というようなことが歌われているが、どうも日本の作詞家の間では、白夜というものが誤って捉えられているようである。

もちろん、こんな“ウソ”でも、人は十分に感動するのだけれども、やはり感動の度合いというのは、

フィクションよりもノン・フィクションのほうが大きいのではないだろうか。そしてこれは、人の演説を聞くときなどには、明らかな迫力の違いとなって表れる。

ところが、こと“作家”ということになると、締め切り間際になってもネタがなくて大変に苦労するという点では、完全に同じである。

ところで、我々弁理士というのは、基本的にはノン・フィクション作家である。全くの絵空事を文章にすることは、基本的にはありえない。そしてまた、発明者というとてもありがたい存在が書く材料を常に提供してくれるので、ネタにも困らない。たとえショート・ショートであったとしても、生涯に千通以上の作品を残せる職業というのは、他にはないであろう。

そう。書くネタがないというのは本当に苦しい。何が苦しいのかといえば、例えばこんなショートエッセイですら、期限までに気の効いたことを書くというのが、とても難しいのである。そんな中でこの10年間、このティーブレイクの殆どを書いてきた。そして私のことをアイディアがこんこんと湧き出る泉であるかのように思っている人も居たようであるが、現実はそのようなものではない。

であるから、いくつかのフィクションはもちろんのこと、「こんな個人的なことまで書いていいの?」と思われるような身内ネタまで書いているではないか。“名手”といわれる人間の正体など、そんなものである。

(正)